

【研究ノート】

学生主体型海外事情プログラム：
企業人交流会企画等を通じた
異文化コミュニケーション能力育成の試み

西 原 明 希

研究ノート

学生主体型海外事情プログラム：企業人交流会企画等を通じた異文化コミュニケーション能力育成の試み

西原明希

目次

1. はじめに
2. 海外事情(英語)プログラムの概要
 - 2-1. 事前学習
 - 2-2. 現地での研修
 - 2-3. 事後学習
3. 省察と分析
4. まとめと課題

【要旨】

本稿は、2014年2月から3月にわたり、本学経済学部・社会福祉学部・文学部心理応用コミュニケーション学科学生を対象に実施された英国での海外研修「海外事情(英語)」プログラムを紹介し、参加学生らがこのプログラムをどう捉えているかを事後レポートから省察する。

学生は事前学習の初期段階から本学提携校であるロンドンリージェンツ大学はじめ現地スタッフの協力を得、各専攻分野・関心領域に関わる学びの企画を主体的におこなった。事後レポートからは、主体的学習の重要性への気づきや、異文化コミュニケーションに関わる意識の変容などが確認された。

1. はじめに

近年、多くの大学で海外研修・スタディツアーが実施されるようになり、その多様な目的、内容、教育効果についても活発な議論が行われるようになった。学習変容論の提唱者メジロー(Mezirow, 1991)は、学習者にとっての知とは、本や教育者の経験のなかにあるのではなく、自身の経験の意味を、自身で解釈し、解釈し直す能力のなかにこそ存在するとしている。また、成人教育において学習者に変容を促すためには、経験型・参加型で投影的な教授法を重要視するべきと述べている。この文脈で藤原(2014)は海外研修・スタディツアーを論じており、学習者と現地の団体・人々との双方向的な交流、学習者自らの参加、体験、協力、また事前事後の学びの共有や省察がなされることにより、自己の実存的な変容が伴うとし、それにより国際的

視野やグローバルな資質を身につけることができる教育活動であるとしている。

鳥飼(2014)は、「今後世界で必要とされる人材」として、多様な文化の共存を可能にするような「グローバル市民性」(global citizenship)をあげ、(2014:191-192)、そこで必要となるのが「異文化コミュニケーション能力」、つまり異質な文化と人に対し心を開き、配慮しつつ、自らの考えを理論的に主張し、折り合う事のできる能力であるとしている。また、国立教育政策研究所が行った、企業が大学・大学院教育に期待する内容についての調査では、多くの企業が、「理論的思考力や基礎的学力」と並び、「異文化や企業等、自分と異質なグループと接する多様な経験」を提供して欲しいと答えている。更に、日本経済団体連合会が2010年に実施した「産業界の求める人材像と大学への期待に関するアンケート」においては、「大学生の

キーワード：海外研修、主体的学習、異文化コミュニケーション能力、変容論

採用に当たって重視する素質・態度・知識・能力」のうち、「主体性」「コミュニケーション能力」「実行力」「チームワーク・協調性」を「非常に重視する」との解答が多い(徳永・初井, 2011)。

本学言語教育部門の海外研修プログラム「海外事情(英語)」は、全学共通(英文科を除く)の英語選択学生を対象にした24日間のプログラム(2単位)であり、2014年は経済学部9名、社会福祉学部9名、文学部心理応用コミュニケーション学科が4名、計22名が参加した。行き先は本学提携校である英国ロンドンリージェンツ大学附属の語学学校で、学生はグループA、Bの2つにわかれ日程をずらし渡航した。学生はホームステイをしながら、午前は語学学校のレベル別少人数クラスで多国籍の学生に混じり実践的英語技能の習得を目指し、午後は学生主体の各交流会・勉強会等の企画運営を行い、異文化コミュニケーション能力、主体性やチームワークの醸成を目指した。本稿では、最初に2014年の海外事情(英語)プログラム概要と学生の活動の一部を紹介し、次にその学習効果について、学生が帰国後提出した事後レポートから考察する。

2. 海外事情(英語)プログラムの概要

2014年の海外事情(英語)は、グループA(12名)は2014年2月15日～3月10日、グループB(10名)は3月1日～3月24日に実施した。海外事情(英語)は前年までは米国で行われており、提携校である英国リージェンツ大学での実施は今年が初めてである。本プログラム企画にあたり、リージェンツ大学スティーブ・フィリップス氏及びケリス・ワトキンス氏、リージェンツ大学MBAでありロンドン在住のグローバルスキルトレーナー、アイクマン理恵氏など、現地ス

タッフと2013年2月より打ち合わせをはじめ、経済学部、社会福祉学部、文学部心理応用コミュニケーション学科の3つの学科から構成される学生たちが、各専攻内容や関心ある分野で主体的に学ぶことができるプログラムのイメージを詳細に伝え、各企画の枠組みを共同でデザインしていった。

2-1. 事前学習

海外事情参加者にはオリエンテーションが5月から1年を通して組まれた。最初に、本プログラムの目的である以下の3点を確認し、これらを達成するために必要な事前準備の内容を確認した。

本講義の目的(シラバスより抜粋)

- 1 集中的に英語を学ぶことで、実践的な語学技能の向上を図る。
- 2 各国から来た学生たちとの学び、また現地でのフィールドワークを通し、国際社会・多文化社会への見識を広げる。
- 3 企業人交流会等の主体的な企画・運営を通し、グローバルな場面での実践的なコミュニケーションスキルを身につける。

事前学習の中から、本稿では以下の4点を紹介する。

① 英語準備学習

英語での対話力の基礎力育成として、学生らの空き時間を利用し「英会話プロジェクト」を行った。このプロジェクトは英語教育学演習Bを履修中の、将来英語教員を視野に入れている英文学科学生と海外事情参加学生で5月に立ち上げたものであり、教材などは英文

科の学生たちが作成した。考査前後などは中断したが、参加学生らの動機は高いままプロジェクトは出発まで続いた。12月にはA、Bどちらのグループの学生も自発的に英語強化合宿を行っている。また、リスニング、リーディングに関しては、年間を通しスーパー英語（E-learning教材）を活用した。

② リージェンツ大学教員陣インタビューセッション企画

学生らが専攻ごとに「自分で学びをデザインする活動」として行った企画の1つであり、リージェンツ大学各学部（スクール）の協力を頂いて実現した。2013年5月より、学生らが4チームにわかれ、リージェンツビジネススクール、ヨーロピアンビジネススクール（経済・経営情報系）スクールオブサイコセラピー&サイコロジー（社会福祉・心理応用コミュニケーション系）など、スクールごとのシラバスを読み込む作業を行った。7～9月、特に自分らの興味のあるコース等を詳細に調べ、話を聞きに行きたいと思った分野をチームごとにマッピング、コース・教授名をリスト化し、グループごとに企画書にまとめリージェンツへ送った。それを元にワトキンス氏が各学部の教員へインタビュー依頼・調整を行った。

③ 企業人交流会企画 —ロンドンで働く日本人企業人・および多国籍企業人—

「会いたい分野の企業人に会いに行く」をキーワードにした、学生とアイクマン氏共同の企画であり、事前準備にあたりアイクマン氏には全面的な学生の遠隔指導を依頼した。まず、グループA、Bでそれぞれ企業人企画チームを構成した後、第一回目のスカイプ会議（2013年11月）にて、アイクマン氏からグループごとの課題が出された。課題は「ロンドン市内で企業人交流会を2回（計4回）行うにあたり、なぜ現地の企業人と交流した

いか、どのような企業人をお呼びしたいかを中心に、タイムテーブルなどを含めた全体的な企画書を作成する」である。この企画書を日本語と英語両方で作るという指示であった。学生らはチームごと、それぞれが関心のある業種、具体的な企業人などをLinkedInなどを使い詳細に調べ、グループ内でのプレゼンテーションを行い、内容を精査し、業種・人物リスト・Q and Aセッションの流れを含め企画書にまとめた。

次に、その企画書をアイクマン氏へ送り、その企画書を使いながらスカイプ上でプレゼンテーションを行った。「なぜその業種の人に会いたいのか」「なぜこの質問をしたいのか」等、学生が明確な説明・理論的な主張ができるまで企画は通らず、どちらのグループも数回の再提出が求められた。アイクマン氏が、最終的に採用された企画書を用い各方面へアプローチをし、当日までの調整を行った。学生らは決定した企業人のプロフィールを元に、チームごとに質問を当日までに約30項目ずつ用意した。渡航までにアイクマン氏とは計6回のスカイプ会議を行っている。

④ その他

上記の他にも、札幌市立北都中学校とロンドン市内のハイランズ中等教育学校とをビデオレターで繋げた交流授業企画、多文化共生が進む南ロンドンのトゥーティン地区でのフィールドワークなどに向け、それぞれ企画チームを作り渡航前の事前準備を行っている。ハイランズ中等教育学校との企画では北都中学校の教諭・生徒らと協力し、日本の中学校紹介ビデオ制作を行い、また当日ハイランズで行う日本文化紹介の授業指導案を英語で作成した。グループごと出発前、渡航後と数回リハーサルを行い、念入りの準備の後に本番を迎えた。

22人のプログラム参加者には全ての企画を通し「異なる学部・学科が混在する集団で協働学習するためのチームづくり」を意識させ、学生らが複数のチームをまたがって企画に参加するよう工夫した。学生達は、渡航までの期間、昼休みや共通の空き時間をそれぞれ工面しながら準備学習を進めた。

2-2. 現地での研修

2014年2月から3月にかけての24日間のプログラムの日程を以下にまとめた。ここでは2-1.で紹介した企画について特に詳細に記述してある。

第1日	札幌～仁川～ロンドン市内 到着, ホームステイ先へ
第2～4日	午前＝語学研修 午後＝企業人交流会チームとアイクマン氏による最終打ち合わせ
第5日	午前＝語学研修 午後＝企業人交流会(1回目) - ロンドンで働く日本人企業人- [Aグループ(3学部合同)] 三村デットィ和恵氏 三菱UFJロンドン支店アナリスト 渡辺さやか氏 The Arts Club Hotelオペレーションズマネージャー 日保田裕子氏 英国心理療術協会(UKCP)公認サイコセラピスト・英国カウンセリング心理療術協会(BACP)公認上級カウンセラー [Bグループ(3学部合同)] 丸茂和弘氏 株式会社クロスメディア社代表取締役 小淵園子氏 空間・グラフィックデザイナー 杉崎正樹氏 多国籍展開レストランDiningsエグゼクティブシェフ兼マネージングディレクター
第6日	午前＝語学研修 午後＝ハイランズ中等教育学校にて、学生と担当指導教諭による打ち合わせ, リハーサル
第7日	・多文化共生地区(トゥーティン地区)フィールドワーク ・シーク教寺院Gurdwaraにて地域のシーク教徒の方々と交流会, Q and Aセッション ・寺院内パンジャビ語土曜学校の見学と寺院食堂での食事会
第8～9日	各自研修(日曜日), および語学研修
第10日	午前＝語学研修 午後＝チーム別, 中等教育学校交流授業リハーサル
第11日	午前＝語学研修 午後＝ハイランズ中等教育学校交流授業(90分×2回) [授業内容] 北都中学校ビデオレター紹介・日本・札幌の歴史と文化のプレゼンテーション・日本語教室・昔の遊び紹介など 放課後: ハイランズ中等教育学校教員たちとのQ and Aセッション
第12日	午前＝語学研修 午後＝企業人交流会(2回目) - ロンドンで働く多国籍企業人- [Aグループ(3学部合同)] マーク・ローン氏 BP(英国石油)広告戦略担当ストラテジストトビアス・トシェ氏 Shellグループ グローバルプロダクトマネージャー レネ・バイド氏 「ロンドン・ガールズ」イベントコンサルタント [Bグループ(3学部合同)] マーク・ローン氏 BP(英国石油)広告戦略担当ストラテジストアレックス・スワロウ氏 ヤングチャリティ財団理事・元上院議員インターン ネッカ・オルジ氏 シェリーブレア女性財団メンター, 経営コンサルタント

第13 ～15日	語学研修, および各自研修 (土・日曜日)
第16 ～19日	午前=リージェンツ大学各学部教員陣とのインタビューセッション <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">経済学部チーム</div> ニキータ・リチャーズ先生 ラグジュアリーブランド経営論 ジェームス・ウィリアムズ教授 不動産経営学・広告論 エリアス・ブクラミ教授 石油・ガス貿易経営論, 国際金融マネジメント <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">社会福祉学部・心理応用コミュニケーション学科チーム</div> フェリックス・デュ・ビューモント博士 ファッション心理学・消費者心理学 イブラヒム・ソケジ教授 多国籍企業経営・移民学 ジョセフ・ミュラー教授 異文化コミュニケーション・異文化間経営学 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">その他 3学部共通セッション</div> 北川利彦先生 (リージェンツ大学日本語講師) 「リージェンツ大学の日本語教育事情について」 マット・マーティン氏 (リージェンツ大学専属カウンセラー) 「臨床心理ワークショップ」 リージェンツ大学内講義聴講 「文化人類学」「国際経済学」「日本語」 メアリー・モンク教諭 「シティズンシップ科特別授業-“Identity and Diversity- Multicultural UK” 協力: ハイランズ中等教育学校・ロンドン大学 大学生との日英比較勉強会 (第17日) 協力: 北川香氏・ロンドン大学 * 第16～19日は, グループ・チームごとに各セッションの実施日程・時間が異なる
第20日	午前= インタビュー総括, 全体プレゼンテーション 語学学校ディレクターより講評 午後=フェアウェルパーティ
第21 ～22日	各自研修
第23日	ヒースロー空港～仁川～札幌へ (到着は第24日)

以下に, 企業人交流会およびインタビューセッションにあたり学生が事前に準備した質問の一部を紹介する。なお, 各当日の実際のやりとりについては, 学生の事後レポートに詳細に記載されているものも多いが, ここでは省略する。

企業人交流会 (多国籍・日本人)

- * あなたが採用担当なら, どんな採用方法を取り, どんな人を採用したいですか。
- * 学生時代の経験で仕事に活かされている

と思うことはどのようなことですか。

- * 働く上で, 働く仲間に対して心がけている事は何ですか。
- * イギリスと日本の働き方を比較し, それぞれの良いところを教えてください。(日本人企業人への質問)
- * イギリスで社会人として働く上で, 日本との違いで一番苦勞したことは何ですか。(日本人企業人への質問)

リージェンツ大学インタビューセッション

- * 私は (北星での) マーケティングの授業でプロダクト, プレイス, プライス, プロモーションの4Pを学習しましたが, 先生の実践では4Pは実際にどのように使われていますか。(ラグジュアリーブランド経営論)
- * イスラム信仰の女性などは肌を隠します。それが女性の人権を尊重することであるという人と, 人権侵害であるという人がいますが, 先生の意見をお聞かせ下さい。(ファッション心理学)

2-3. 事後学習

学生は, 帰国後1週間以内に事後レポートを提出した。レポートの題は「海外事情で学んだこと」とし, 企画を始める前と後, 英国に渡航する前と後などを比較して振り返り「自分の中に変化があったことやきっかけがあればそれを記述すること」と説明を付け足している。そのレポートを省察したのが, 次の3. である。

事後学習として, 他に主なものを二つ記述する。一つ目は, ハイランズ中等教育学校の

企画にメインで関わった学生らが札幌市立北都中学校に再び赴き、メッセージビデオを流した時のハイランズの生徒の様子や彼らからのメッセージをまとめ、報告プレゼンテーションを行ったことである。北都中学校ではこれを後日英語授業の教材として使用し、二校の交流は今年度も継続予定である。二つ目は、リージェンツ大学教員陣インタビューセッション、企業人交流会など各企画をまとめた報告冊子を、市内のグラフィックデザイン会社の協力のもと作成している。各企画は日本人企業人の部分を除いてはすべて英語のインタビューであるため、レコーダーの音声起こし、集約、現地とのバックトランスレーション作業など、学生にとっては根気のいる作業となっている。この冊子は国際教育センターの「教育の国際化」事業の一貫として、第一冊目が11月に発刊された。この冊子は来年以降に渡航する学生らへ向けての企画テキストブックとしての役割を果たすことも想定している。

3. 省察と分析

次に、学生らの事後レポートをもとに、彼らが多様な人々とのインタラクションや主体的な企画運営を通し、主体性、異文化コミュニケーション能力などにおける成果や変容をどう捉えているのかについて、以下のカテゴリーに分け抽出した。

① 英語でのコミュニケーションへの姿勢

まず、学生の記述の多くに見られたのが、各企画がきっかけとなり、英語でのコミュニケーション姿勢に変化が見られたエピソードである。代表的な記述は以下のようなものである。この学生は日頃から発言が少ないタイプの学生であるが、自己の変化についてこう記述している：

「企画を始める前や海外事情の初期は、英語で何か発言するときに、間違っていたら恥ずかしいなどと考えて声が小さくなったり、文章を完璧にしようとして発言に間が開いてしまい、会話の流れを切ってしまうことが多かった。」

しかしこの学生は「間違ふよりも、黙り込んでしまったり、声が小さくて相手に聞き返されてしまうことのほうが“相手にも失礼である”と考える」からは、英語でのコミュニケーションへの姿勢が変わってきていると考え、企業人交流会でのネッカさんとのやりとりをこう記している：

「多国籍の企業人交流会の時にNnekaさんが、『あなたたちは日常で何か、自分が周囲にバリアを張っていると感じたことはあるか』という質問をしてきたときに、自分が語学学校で間違いを恐れたりして発言が一手遅れ、その間に会話が進行してしまったときの話を、つまりながらも率先して答えることが出来たときには、一歩前進できたように感じた。」

② 主体性・考えを理論的に説明する力

各企画がこだわった要素の一つが「主体性」であるが、以下の学生は、事前準備を振り返り、企業人交流会の企画書の作成が何度も難航したこと、それによって理論的に説明する力や表現力が鍛えられたことを、スカイプ会議の様子を記述する中で振り返っている：

「私たちが調べて探した企業人の方はたくさんおり、全ての準備に費やした時間は膨大でした。(中略)…会議の中で、私たちがアイクマンさんからよく言われていたのは、『(なぜその人に会いたいのかの理由を)もっと具体的に』という一言です。なんとなく会いたいというので

はなく、具体的に、どのような目的を持って、どのような人に会いたいかを考えなければなりません。』

次の学生も、事前準備について、企業人へ交流会の中で尋ねる質問づくりの過程とそこでの学びを以下のように記述している：

「(アイクマン氏に指摘されるまで) 幼稚で大学生がするような質問ではなかった。企業の方が『大学生やるね』と思うような、おもしろい話が聞けるような質問、私たちだからこそ聞くことができる質問を必死で考え、試行錯誤していくうちに、質問の内容は大きく改善され、質の高い質問を作るスキルが身に付いた。それと同時に自信もついた。(中略) 自分の経験から質問を考えたり、いつもと少し異なった視点から見つめて考えたり、広い視野で思考することを学んだ。」

また、次の学生も、研修の成果を省察しつつ、帰国後の目標設定について以下のように記述している：

「ひとつの問題に対して納得のいくまで考えるということ。一緒に頑張ってきた仲間との信頼関係、しかしその仲間の意見に左右されず自分の意見を持つ事。多くのことを学び、得る事ができた。(中略) 自分の意見は言えるようになった。しかし、まだ具体的に言うということは苦手である。この経験を活かしながら、この大きな課題を克服できるように多くのことに積極的に参加して行きたいと思う。」

③ 課題解決能力とチームワーク

学生らのなかには、現地での想定外の問題や想定していなかった悪条件への対処場面について記述しているものも多数あった。課題

解決能力に関わる記述の代表的なものを抽出する：

「多国籍の方との(交流会)企画当日に1人のビジネスパーソンが10分遅れることがわかり、アイクマンさんに『(会進行の変更について具体的に) どうする?』と聞かれました。それはもうあと5分ほどで企画開始時間になるときで、私たちはすばやい判断が求められました。話し合いは3~4分ほどで、その中で私は意見を出すことができました。(中略) このときはっきり覚えているのは『時間がないから何かアイデアを出さなくては、否定されてもいい、むしろ何か新しいものが生まれるかもしれない』と思ったことです。」

④ 異文化コミュニケーションへの態度

最後に「異質な文化と人に対し心を開き、自らの考えを主張し、折り合う事のできる能力(鳥飼, 2014)」としての異文化コミュニケーション能力に関わる部分を抽出する。多くの学生が、特に印象に残った人との出会いとそのやりとりを詳細に振り返っている。その中に、想定外のやりとりの新鮮さや、逆に自分と異質なものと捉えていたものへの意外な共感部分など、学生の異文化理解への学びが多く見て取れる。まず、差異からの気づきの代表的な声としては以下のようなものがあげられる：

「(多国籍の企業人の方々は) 日本人の企業の方と少し類似したような考え方もあれば、生まれたときから外国にいて日本にいたら考えつかないような考え方もあり、たくさんのことを吸収できた。」

「(自分は) イギリスには公立病院と私立病院があって(中略) 貧富の差によって

医療格差が出てしまう。これについてどう思うか、という質問をした。お金がないときは公立の病院を受ければ良いし、両方あってもいいのでは、という答えが出て、衝撃を受けたのと同時に今までのこの問題に対する固定概念が崩れた。自分の固定概念が絶対と思わずに、柔軟に物事を考えていこうと思った。」

次に、共通部分の発見に関わる記述である。以下の経済学部学生は、企業人交流会のリーダーであり、英語での企画書作りに腐心し、当日も英語でのMCをつとめた。企業人の一人に「リーダーとしてまとめる難しさ」について質問した様子を以下のように振り返っている：

「多国籍企業人の方々と交流する中で(中略)リーダーという存在の意義や、私がこれから目指すべき姿を頭の中にイメージできるようになりました。(中略)私は海外で働く人は、仕事にだらしないイメージが強かったのですが、優秀なリーダーほど、日本と同じように尊敬されるような行動を日頃から心がけているという共通点を発見することができました。」

次の学生も、ある企業人とのやりとりが自分の今後の学びの姿勢について変容をもたらすきっかけとなったと述べている：

「ビジネスパーソンとして一番必要不可欠なものは何か、という(質問をした)ところで、Marcさんの“Humanity”という言葉聞き、本当に人間性はどこの国に行っても問われることだと感じた。この言葉によって人間性、自分の持っている感性を常に磨いていきたいと思えた。」

このように、学生らは、事前学習の段階から自分たちの学びを自らデザインすることにより、学びが主体的なものとなり、経験を省察することにより変容が観察されていると言える。メジロー (Mezirow, 1991) は、学習者に変容を促すための教育者の役割として、「学習者の、教育者への依存を徐々に減らし、また、相互的学びに関与できるよう援助」し、学習者の現在の個人の問題や関心・理解度に照らし合わせ何を学ぶべきかの体系だてを支援することとしている。個人差はあるが、学生主体型の各企画が学生らの主体性や異文化コミュニケーション能力の育成へのきっかけとなった可能性は大きいと言える。

4. まとめと課題

本稿では、海外事情(英語)プログラムの概要の中から、特に学生主体の複数の企画運営の部分を紹介し、事後レポートの分析により、当プログラム事前学習から現地渡航までの、人々との双方向的な交流、学びの共有や省察を通しての、学生の変容の検証を試みた。1年間の長期留学などと比べ、24日間の研修は短い。しかしながら、今回の省察からは、この研修が「グローバル市民性」を持った学生を育てるきっかけづくりとして、少なからず機能していると捉えることができる。

今回の研修では、各能力の具体的測定を行うためのフレームワークを使った分析は行っていない。今後同様のプログラムの教育効果を測るためには、メジロー (Mezirow, 1991) の変容論などからのフレームワーク構築が必要である。海外研修プログラムを通しての異文化コミュニケーション能力、主体性、実行力、チームワーク等、各項目における教育効果分析を、より理論的に進めることが今後の課題である。

参考文献

齊藤毅憲・佐々木恒男・小山修・渡辺峻監修,
全国ビジネス系大学教育会議編 (2010). 『社会人
基礎力の育成とビジネス系大学教育』学文社.

藤原孝章 (2014). 「特定課題研究プロジェクト
について」国際理解教育学会編『国際理解教育』
20, 36-41.

藤原孝章・栗山丈弘 (2014). 「スタディツアー
におけるプログラムづくり：『歩く旅』から『学
ぶ旅』への転換」国際理解教育学会編『国際理
解教育』20, 42-50.

Mezirow, J. (1991). *Transformative Dimensions
of Adult Learning*. San Francisco. Jossey-Bass
Publishers.

徳永 保・舛井圭子 (2011). 『グローバル人材
育成のための大学評価指標－大学はグローバル
展開企業の要請に応えられるか－』協同出版.

鳥飼玖美子 (2014). 『英語教育論争から考える』
みすず書房.